

## 新しい教育空間に関する取り組み 2011年度

「新しい教育関係ユニット」では、この5年間に亘って、「教育とは何か」「学校とは何か」ということを、教育現場との実践的な関わりを通して模索してきた。その活動の中でも、学校訪問・教師や学校スタッフとの研修会・アランププロジェクトを大きな3つの柱として進めてきている。それらの柱ごとに、これまでの活動において何がなされてきたのか振り返ってみたい。

### 1. 学校訪問

#### 一 洛風中学校との関わり

不登校生徒の為の自立と学習支援を目的とした新しい学校形態をもつ洛風中学校と、京都大学教育学研究科とは、心理臨床学関連領域の講座を中心に開設当初より関わりをもってきた（洛風プロジェクト）。2007年度より、コラボレーション・センターとして、「自分たちが行っている教育実践がこれでよいのか」「外部からの視点で、私たちの教育実践を捉えなおしてほしい」といった洛風中学校の教師の声にこたえるべく、関わりが開始された。洛風中学校との関わりは、一度限りの訪問という形ではなく、継続的に続けられたことに大きな意義があるだろう。教員の異動や学校としての取り組みを積み重ねることで生まれてくる変化など、学校の歩みを間近に見ていくことが可能となっていた。時間の経過、変化の様相に伴い、学校現場の抱える悩みや難しさ、教育現場において何が起きているのかということも変化し、それを教育の現場から得て、外部の視点からとらえ直していくという作業は、固定化されずに教育の可能性を探る場になっていたといえよう。洛風中学校との経年的な関わりは、まさに新しい教育空間や教育関係を「作る」ということを共に歩むものであったように思われる。

#### 一 独自の取り組みを行う学校への訪問

洛風中学校との経年的な関わりは、深く学校現場や教育というものを見つめ、コラボレーション・センターと洛風中学校との相互的なやり取りの中で共に歩みながら教育を考えるという点で非常に大きな意味を持っていたと言える。

そして、2007年度から行ってきた八王子市高尾山学園、愛知県黄楊野高校、和歌山きのくに子どもの村学園、北海道北星学園余市高等学校、大津島小・中学校、生野学園高等学校・中学校といった、独自の取り組みを行う学校への訪問は、それとは異なる形で、学校や教育について考える視点を得られたものであった。この取り組みからは、新しい教育関係が様々な形を持ちうるものであり、その土地の風土や学校の特質、理念などを最大限に生かすことのできる場であるという気づきが得られた。「学校」というものは自明なものではなく、そこに存在する教師や生徒、教育に関わる多くのスタッフ、地域などの連携によって、その形が生

み出されるということが明らかになった。



▶北星学園余市高等学校学園祭より

### 2. 研修会

2008年度と2009年度には学校教員との合同事例検討会や学校教員をはじめとする他職種と心理臨床家の交流という形で、研修会を行った。このような研修会は、前述した学校訪問の形とは異なり、学校の内部で働く教師やスタッフの横の繋がりを作ることを可能にした。学校現場の内部の視点からの意見を交流させることで、それぞれの実践を相対化し、工夫から学ぶということが行われた。普段、実際に子どもと関わる教師やスタッフ同士でも意見交換をするということは時間的にもエネルギー的にも難しいということがうかがわれ、教師やスタッフ自身の活動を確かめ合うということは、現場に還元できる活力にもなるようであった。現場が求める心理臨床家への期待の大きさ、連携に伴う難しさについて、現場で働く教師の苦労話から聞こえてくる「生」の声を得ることも、大きな成果であった。



▶シンポジウムの様子

### 3. アランプロジェクト

2010年度には、アラン・グッゲンビュール教授（スイス・チューリッヒ教育大学）と共に、アラン・プロジェクトを行った。これは、日本の学校現場に「ミソドラマ」を応用する初の試みであった。グッゲンビュール教授が考案した「ミソドラマ」は、学校現場で暴力をふるう子どもや、子どもの抱える葛藤に、教師が取り組むための新しい手法である。これは、子どもの心理的な内面に触れ、イメージとして扱っていくという手法であり、学校訪問や研修会でやってきたこととはまた異なるアプローチであると考えられる。実施したミソドラマでは、セッションの中で生徒の心理的テーマや、生徒同士および教師-生徒間の人間関係に関するテーマなどが表現された。ミソドラマを行うことで、子どもたちの持つエネルギーが活性化され、学級の変化につながるきっかけになったとも考えられた。今回のプロジェクトが直接的な効果や影響を与えたかどうかは明らかではないが、何らかの「インパクト」があった可能性も存在する。この手法は、子どもたちの内面的な動きを通して問題に対する示唆を得られるものであるため、今後さらに改善を積み重ね、教育現場に資する方法の開発・実践に努めたい。

学校に配布された趣意書の一部

#### 「アランプロジェクト」について

##### 目 的

学校では、さまざまな子どもたちがともに生活していますが、教師が子どもたちのところを理解することはそうたやすいことではありません。特に、思春期に入った子どもたちは、自分の気持ちを教師に素直に語ることが少なく、「何を考えているかわからない」と思う教師も少なくないでしょう。

客員教授として今京都大学を訪れているアラン・グッゲンビュール教授は、こうした子どもたちのところを理解する方法として「ミソドラマ」という手法を考案しました。これは、「何を思っているのか」と直接問いただすのではなく、「物語」を媒介とし、それを演じることによって、みずからの気持ちを自然に、抵抗なく表現するという手法です。

こうした手法によって、児童・生徒は、知らず知らずのうちに、みずからのうちにある葛藤や悩み、あるいはその解決方法への示唆をも「表現」することができるのです。

アラン・グッゲンビュール氏は、スイスにおいて、特に学校内で暴力をふるう子どもたちへのかかわりで実績をあげており、着実な効果を見出しています。

今回日本においても同様の取り組みをすることによって、子どもたちのところを教師が理解し、問題行動を示す子どもたちへのアプローチに対するヒントを得たいと考えています。

最近、特に、言葉のみずからの気持ちを語ることができず、行動でしめすだけで、その意図も理由も語らない子どもたちが増えている現状があります。そんな現状のなかで、この「ミソドラマ」という新しい手法は、重要な示唆をあたえるものと期待されます。

##### 方 法

以下のような手順でミソドラマが実施されます。実際の施行手順や時間などは、実施される学校と相談のうえで決めたいと考えております。

(以下略)

### 4. 新しい教育関係—教育・学校を考えるということ

このように、この5年間を通し、「継続的に学校に関わり深い理解をもつ」、「学校内部での横のつながりを作り、意見を交換しあう」、「生徒の内面にミソドラマという手法を用いて関わる」というような、それぞれ異なる観点やアプローチで学校現場に関わり、新しい教育関係というものについて考えてきた。多角的な取り組みによって、学校や教育というものは、絶えず新たな目で見つめることで、新たな姿や可能性を見出すことが出来るものであるということが認識された。つまり、学校というものは「自明」のものではなく、たえず変貌する可能性をもち、また、日々「新しく」生まれうるものだと考えられる。

さらに、教育現場に赴き、生の声を聞いたり、年月をかけて相互的なやり取りを行ったり、生徒の内面に働きかけるアプローチを取ったりと、教師や生徒が生きる実践の場に触れることで、「学校」というものは1つの形ではなく、生きた関係性が動く場であるということが感じられた。だからこそ、教育の場では悩みは尽きず、試行錯誤が繰り返され、変化し続けるのである。それこそが新しい教育空間が作り出されるということの意味しているのであろう。今回の活動で得られた知見が、また現場に還元され新しい教育空間や教育関係を形作る一つの材料になるよう、さらなる実践と連携を、今後も深めていきたい。

(文責：桑原知子)